

# 神戸在住レコードコレクター 辻山幸一氏への聞き書き

——その3「新内」を語る——

飯塚恵理人 大山範子 辻山幸一

これまで筆者らは新派の俳優達について神戸在住のSPレコードコレクター辻山幸一氏への聞き書きを行ってきた<sup>1,2)</sup>。本稿では2022年3月17日に飯塚と大山が辻山氏の自宅を訪問し、氏のSPレコードをデジタル化した音源（飯塚のホームページ「恵理人の小屋」の「辻山幸一コレクション 新内節」(<https://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erit01/tujishinnai1.html>)で公開)を聞いていただきながらインタビューした内容を紹介する。

新内（新内節とも呼ぶ）は江戸時代、豊後節から生まれた三味線にあわせて唄う浄瑠璃の一派で、門付けと呼ばれる流しの芸人によって唄われた。特に遊郭の様子や男女の仲、心中などを題材とすることから「卑俗」「良風に反する」と低い評価を受けた時代があった。インタビューでも、新内を愛好する・演奏するということが上流階級の家の女性達には許されなかった雰囲気があったようなことが述べられている。

しかし大正から昭和初期にラジオ放送で取り上げられるようになり、男女間の機微や庶民の哀歓を描く優れた語り芸の一つであると認識されるに至った。もちろん当時は「卑俗」「良風に反する」歌詞は穏当なものに置き換えられ、長さも放送時間に合わせたものに改変された曲が放送されることが多かった。

以下に、インタビューを活字化したものを示す。本論に関係のない部分は適時省略している。曲名

などは「」付けし、理解を助けるために飯塚が（）内の語を補い、説明が必要と思われる言葉には★以下にその説明を付けた。

飯塚恵理人（飯）：まず富士松加賀太夫の「明烏」です。「楽しむこともあるべきか」。曲の後半ですね？

辻山（辻）：そうです。

〈「明烏【明烏夢泡雪】 浦里部屋」(4)楽しむこともあるべきか(浄瑠璃：富士松加賀太夫、三味線：富士松富士三郎、上調子：富士松喜美造、レーベル：ニッポノホン 赤、音盤番号：15300-B(15300B))を聴く〉

★富士松加賀太夫（七代目）：生年は安政3年（1856年）2月29日。没年は昭和5年（1930年）10月4日。（中略）5代目加賀太夫に師事、津賀太夫、富士太夫を経て、明治35年7代目を継いだ。無類の美声で、実弟の4代目吾妻路宮古太夫（のちの8代目加賀太夫）の三味線とコンビで、明治から大正にかけて一世を風靡した。俗に“7代目節”といわれ、現在の新内節に大きな影響を与えた<sup>3)</sup>。

辻：浄瑠璃やね。

飯：今聴いて戴いたのが富士松富士三郎と富士松加賀太夫。（加賀太夫は）七代目なんですが、これはいつくらいのものなんでしょうか？

つ：ニッポノホンでしょう、これ。ニッポノホンですから明治中頃ですよ、録音してるの。

飯：明治中頃ですか。

辻：明治中頃と言うか、結局、日本でレコードがプレスされた最初の方ですね。その時代です。昔からの新内だと思います。それから大正までは(このような感じで)大丈夫かな。昭和になったら、下々の新内語りは「歌」になってしまいましたね。

飯：「語り」じゃなくてですね。

辻：語りじゃなくてね、サワリしかしないから。元々声を延ばさないのに、声を延ばす。そういう風な芸が変わってしまいましたね。新内志賀太夫、その当時の岡本文弥ともう一人、なんやったかな…その三人が新内語りのちゃんとした基本ですよ。

飯：では次は同じ「明烏」の浦里部屋なんです、富士松長門太夫がやっています。富士松長門太夫はいつごろの人ですか。

つ：戦前だと思います、間違いありません。

〈「明烏【明烏夢泡雪】浦里部屋」(浄瑠璃：富士松長門太夫、三味線：富士松喜昇、上調子：富士松昇寿、レーベル：ビクター 黒、音盤番号：51932-A(2808)、51932-B(2809)、51933-A(2810))を聞く〉

★富士松長門太夫(初代)：生年は明治9年(1876年)。没年は昭和13年(1938年)5月21日。(中略)鶴賀加賀歳に学び、新登太夫、明石太夫を経て、富士松長門太夫<sup>4)</sup>。

飯：これは録音時間が三分を超えているので、それを考えると明治ではなくて大正7年より後だと思いますが。

辻：そうですね。明治の電気録音以前の録音はひどいですよ、聞くのが。

飯：本当に雑音ばかりで聞こえないことも結構多いです。

辻：どないしても義太夫とかなんとか、そういう

声の強いものの方が、録音する時に音がよく録れましたね。

飯：そうですね。

辻：僕は思いますが、やっぱり新内など、下町なんかの愛好家が上流家庭などでは聞かないようなのを聞きたいという需要が多かったんじゃないか。かなり(当時の愛好家に)受けていたんじゃないか。そういう気がします。

〈「明烏【明烏夢泡雪】雪責」(浄瑠璃：七代目富士松加賀太夫、三味線：四代目吾妻路宮古太夫、レーベル：トーキョー 赤、音盤番号：2788A(2788A)、2788B(2788B)、2789A(2789A))を聞く〉

★吾妻路宮古太夫(四代目)：生年は安政6年(1859年)2月29日。没年は昭和9年(1934年)4月15日。(中略)7代目加賀太夫の実弟。鶴賀秀太夫に学び、鶴賀小秀太夫、鶴賀直太夫を経て、大正2年4代目吾妻路宮古太夫を名乗り、明治末期から大正にかけて兄の7代目加賀太夫の三味線をひく。昭和5年7代目の没後8代目加賀太夫を襲名<sup>5)</sup>。

飯：この加賀太夫とか宮古太夫という人は大阪の人ですか、それとも東京の人ですか？

辻：東京だと思うんですよ。

飯：(これらは)先生が持ってらっしゃる(レコードな)んですが、レーベルがニッポノホンとかビクターですね。先生が持っていらっしゃる(物の中で)オリエントとかは明らかに関西ですよ。

辻：そうですね、関西系レーベルですね。

飯：ニッポノホンとかだと東京系レーベルかなという気がします。

辻：たぶんそうです。それからオリエントというレーベルも複写版が出てますね。私ももう少し勉強しなければいけないんですが…もう遅いんですけど(笑)。関西系の複写版というのは関西映画の複写版が多いですね。

飯：富士松亀三郎はいつ頃の人ですか。

★富士松亀三郎：「蘭蝶」「峠三里」を作曲した4代目ならば生年は明治44年（1911年）10月11日。没年は昭和61年（1986年）5月14日。昭和9年（1934年）に3代目亀三郎に師事している<sup>6)</sup>。後に「(七代目)加賀太夫と一緒にやっていた」という辻山先生の話が出てくるので、年代からこの亀三郎は3代目の可能性があるが確かなことは分からない。

辻：私もちょっと分からないんです。私が見たレコードのレーベルの中に、その上に、レーベルの上にもう一枚、(レーベルの)小さな(紙の)部分に他の紙が貼り付けてあるんです。「うぐいす印」とか(の紙が)ね。そういう、いとも怪しげなレコードが多かったですよ。私が見たもので…。あの当時の複写版というのは、なんと言いますか、一番ひどいものは砂を撒いている(ようなデコボコした)上に録音したような、そんな(風に思えるほど)ひどいものです。そういうのがずいぶんあります。

飯：富士松綱太夫というのは何時くらいの人ですか。

辻：その人も私、そういう(詳しい)経歴までは追求しませんでした。それでも(このディスクは)戦前(の物)で、音はけっこう、ちゃんとした音が入っていると思います。

飯：富士松綱太夫と、さっき言った富士松亀三郎。これはあの加賀太夫と一緒にやっていた人ですか。

辻：そうです。

飯：それと富士松鶴三郎の…

辻：三味線。上調子でしょう。

飯：上調子です。じゃあちょっと聞いてみましょう。

〈『明烏【明烏夢淡雪】雪責』(浄瑠璃：富士松綱太夫、三味線：富士松亀三郎、上調子：

富士松鶴三郎、レーベル：コロンビア 黒、音盤番号：26741-A(36020)、26741-B(36021)、26742-A(36022))を聞く〉

飯：これも「甲がきいた声」と考えていいですか。

辻：「甲がきいてる」で聞いてました。

飯：いまのはレコードそのまま(の音)で、(デジタル化する時に)ノイズ(キャンセリング)くらいはしてありますが、それほど加工はしていません。

辻：でもきれいですね。

飯：では今度は、カセット(テープ)で辻山先生が提供してくださった音源から、ラジオ(番組)の(音源)を聞いてみましょう。「若木仇名草」は新内ですよ。

辻：はい、「蘭蝶」です。

飯：「蘭蝶」ですね。

〈『新内「若木仇名草」(蘭蝶)』(浄瑠璃：岡本文弥、岡本宮園、岡本宮子、三味線：岡本宮染、上調子：岡本宮之助)を聞く〉

★「若木仇名草(わかきのあだなぐさ)」：新内節の曲名。端物。通称「蘭蝶」。(中略)もともと古い端物の一つで、《明烏》《尾上伊太八》とともに新内節三大名曲の一つといわれている。(中略)新内節ならではの哀調をおびた曲である。大曲なので〈お宮口説〉を中心に演奏されることが多い<sup>7)</sup>。

★岡本文弥：新内節演奏家・作曲家 新内節岡本流家元。生年は明治28年(1895年)1月1日。没年は平成8年(1996年)10月6日。(中略)母は鶴賀若吉、富士松加賀八を経て、3代目岡本宮染を名乗った新内の師匠。(中略)中央新聞で校正係を務める傍ら、母に新内節を学ぶ。また文学青年でもあり、永井荷風や北原白秋に私淑して「秀才文壇」「文章世界」などに投稿した。大正2年富士松加賀路太夫を名乗る。5年「秀才文壇」を発行する文光

堂に入り、その編集に従事。12年母が独立して岡本派を再興し、4代目家元となったのを機に岡本宮太夫、後に文弥と改めた。(中略)戦時中は(中略)移動演劇の舞台座に所属し、俳優として活動。戦後、新内語りとして復帰(中略)著書も多い<sup>8)</sup>。

飯：(きわどい内容になってきたので) ちょっとこの辺でやめておきましょうか。

辻：こんなのが道を歩いていて聞こえてきたら、「あの家には嫁にはやれん」と言われてしまうくらいのもですね。

飯：そうですね、品の良い家庭の(趣味)ではないですね。

辻：(笑いながら)絶対無理ですよ、こんなもの。私自身も聞いていて「よくこんなもの集めたな、我ながら」と感慨にふけていたところです。

飯：「お駒才三」の「城木屋の段」。加賀太夫と…。「見送る才三が思案顔…」からちょっと聞いてみましょう。

〈「お駒才三【城木屋の段】(浄瑠璃：七代目富士松加賀太夫、三味線：富士松喜美造、上調子：富士松加賀広、レーベル：ニッポノホン 赤、音盤番号：16483-A(16483A))を聞く〉  
★「恋娘昔八丈(こいむすめむかしはちじょう)」：新内節の曲名。段物。通称《お駒才三》。(中略)義太夫節の同名曲のうち、四段目と五段目を新内節に移したもの。(中略)義太夫節とは違った新内節の特色が発揮されて人気曲となっている<sup>9)</sup>。

飯：これもニッポノホンですからけっこう古いと思うんですが。

辻：そうですね。大正の始めでしょうか。でもニッポノホンにしては(音が)きれいに入っていますね。

飯：そうですね。(でも私の手元には)新内(の

SPレコード)は先生のだけしかないので、(先生もお聞きになっておられるレコードです。)

辻：(笑いながら)そりゃそうですね。(他には)どこにもないでしょう。(でも飯塚)先生がこんな(「危ない」内容のレコード)を持っていると知れ渡ったら、(椋山女学園大学の学生達の)父兄から怒られますよ。

飯：(身分)階級と芸は、やはり結びついていたんですよ、戦前は。

辻：そうですね。

飯：(階級の低い人達は新内などを好んだんですが、)逆にお嬢様だったら「琴の免状くらい(は持っていないと恥ずかしい)」というのがあったので、どこでも琴を「真の手」ぐらいは稽古させたんですよ。国風音楽会の検校さん達が(一般の婦人達に琴を教えることが)はやったのはそういう時代だったからですね。

辻：まあそういうことですね。

飯：「真の手」の免状は何枚も椋山女学園大学の卒業生の御実家で拝見しました。とにかく(皆さん、琴が)好きで免状を取ったとは言わないけど、椋山に入るときに「琴の免状くらいは取っておきなさい」と親に言われたのだそうです。

辻：普通のちゃんとした家庭だったら、お琴の免状は必要でも三味線の免状はいりませんよね。

飯：三味線だと芸者さんになってしまいますね。

辻：そうですね。

飯：そういう感じですね。琴は(習う人が)多いんだけど、三味線はちょっと花柳界のもの(という感じ)です。

辻：三味線に限っても、(例えば)地唄の三味線だったら船場の、これという家の奥の方で爪弾きで(奏でる)くらいのことはあったかもしれませんが。それでも、長唄の三味線みたいに外までピンピン聞こえるというようなことはありえません。激情? 劇場? 音楽ですから。

飯：そうですね。

辻：ことに新内などと言えば豊後節に属する「あれ」ですから。「豊後かわいや丸裸」ですか？そういうくらいですから。新内など嗜んでいると言ったら、よそに聞こえたら悪いですな。

飯：先生が持っていらっしゃる「尾上伊太八」のコロンビアの赤盤で「舞踊用」というのがありますよね。

辻：「舞踊用」というのは、三味線、長唄などで時々売り出しているんです。普通、レコード(のシリーズ物)というのは「1、2…」でしょう、「1、2」で一枚のレコードの表裏でしょう。それがこの「舞踊用」というのはですね、この「尾上伊太八」の二枚のレコードの記録を取っていて分かったんですけど、「1、2」というのは(普通)レコードの盤の1面、2面ですよ。(ところが)このレコードはひっくり返すと1の裏に3が、2の裏に4が入っているんです。(飯塚注：上記の「尾上伊太八」レコードの音盤番号を見ると(1)と(3)が100473、(2)と(4)が100474で同じ盤である)、だから連続で聞けるんですよ。(つまり)蓄音機を二台用意して、こっち(の再生が終わってレコードが)切れたら、(準備してあった)こっちをすぐ再生すると(音楽が切れることなく再生できる)。それが「舞踊用」なんです。新内の「舞踊用」というのは、「踊りはどうするのだろうか」と考えました。(飯塚注：新内は、長唄や清元に比して踊りの地とすることは少ない)その当時、まさか色町ではないだろうけど、子供に振り付けの(練習)をさせていたのかなという疑問があったんです。

飯：僕は(芸者さんの三味線は)見たことがないです。新内とか清元とかそういう三味線音楽を聴くようになるのは、大学の教員になってから近世文学もやるようになって、(聞かなければ)ならなくなってからです。

辻：そりゃそうでしょう。

飯：近世文学もやらなきゃいけないよ、「キミ、

謡曲の先生だから名古屋市芸術祭の審査委員もやって」と言わたのが四十六(歳)の時でした。そこで「歌舞伎は見たことがあるけど、踊りとかは知らないんです」と言ったら、「勉強だから行ってらっしゃい」と安田文吉先生に言われて行きました。それでその頃、名古屋の新内舞踊というと藤間勘章先生が会をやっておられました。藤間勘章先生の会だけは新内で踊るんだと思っていました。

ということで「舞踊用」のレコードを少し(聞いてみます)。聞いた限りでは普通の新内とあまり変わらないですが、緩急ははっきりしています。

〈「尾上伊太八」舞踊用、浄瑠璃：富士松武蔵太夫、三味線：富士松寿輔、上調子：富士松鶴三、囃子：梅屋社中、レーベル：コロンビア 赤、音盤番号：(1)あとには尾上は伊太八が100473(1207827)、(2)お顔見る日はないわいな100474(1207828)、(3)わずかな筆の命毛で100473(2207829)、(4)尾上はいとどしゃくり上げ100474(2207830)を聴く〉

★「婦咲名残命毛(かえりざきなごりのいのちげ)」：新内節の曲名。端物。通称《尾上伊太八》(中略)津軽岩松藩の江戸詰祐筆役原田伊太夫が、吉原の遊女尾上と深い仲となり、勤めをおろそかにしたため、免職となり、ついに心中をはかったが未遂に終わった。その事件を脚色したもの(中略)ふつうには下の巻の〰逢い初めてより一日も」の尾上のクドキから、死支度の件までが語られる<sup>10)</sup>。

辻：(最後のセリフのところを指して)振り付けするんでも、振り付けしにくいでしょうね、今のところなんか。

飯：そうですね。僕は、新内舞踊は藤間勘章先生のビデオでは何回か見えています。安田文吉先生に「名古屋は人が少ないんだからなんでもやらなきゃダメだ。何でも聞きに行かなきゃいけないよ」

と言われました。名古屋市芸術祭の審査委員をしていた頃、だいたい今から二十年前くらいになるのですが、大正世代の人がそろそろいなくなり始めていました。今考えてみると、大正の世代の人はやっぱり階級の影響を受けていたのでしょうか。日本舞踊や踊りの人というのは、ほとんど(名古屋の)堀川端の川筋、すなわち当時の花柳界、大正時代にはまだ大須とか、中村遊郭がありました、あちらの関係の方が多かったですね。

辻：神戸なら花隈と福原みたいな所ですね。遊郭と(陽気に)手をたたいて飲む場所が同居しているというところで、(そういう場所は)下に見られていましたからね。

飯：やっぱり二十年前ごろには「川筋の芸人」みたいな呼び方をしていました。金山、熱田あたりの堀川端の人たちをです。あの辺りには浄瑠璃とか端唄とか長唄の稽古場がありました。これが御用商人の住むところでしたら、(名古屋なら)伏見とか碁盤割の中です。謡曲と地唄、箏曲がお稽古されている。(堀川端と碁盤割は)そんなに離れていないんです。二、三キロ(メートル)くらいの距離なんですよ。そこに上町と下町の厳然とした差がありました。

辻：ほんまに、(境界線を)太い筆でびゅっと書いたような感じですね。

飯：ええ。(元御用商人の家の人達は)謡曲に…箏曲、それも国風音楽会の先生に習うのがステイタスであるという風習が、まだその頃には残っていました。端唄や小唄というのは(そこではもう一つ)下に見られていました。

辻：ぱっと聞いただけで分かりますものね。

飯：本当に、そういう(「階級ごとの芸能の違い」)がまだありました。まず(それぞれが会を)やる場所が違う。(能は)能楽堂でやるのですが、(日本舞踊などは)金山の市民会館の小ホールでやるという違いがありましたし、楽屋に入った時の雰囲気も違いました。(出演される方に)いかにも「元

玄人」さんでしたという雰囲気の人の方が、日本舞踊の会におられましたから。大きい芸子さんだったんだなと。

辻：(そういう方は)ふっと振り返るような(垢抜けた)感じ(の女性)ですよ。「元プロ」という方は、あれは…どういのでしょうか…「私は元プロではありませんよ」という顔をしていても、ふっとこの辺に出ますよね。

飯：それなりの年配の方なんですけど、「この人は昔、玄人さんだったんだな」と思わせる。

辻：そうそう。

飯：僕らは就職する時は(能という)演劇をやっているとは言えない時代でした。

辻：そうですね。演劇書など持って歩いていたら「アカ」だと言われましたからね。

飯：前進座が来た時に、「あんなものを見に行くと、河合塾と朝日新聞しか就職先がありませんよ」と学生課がスピーカーで怒鳴っていた時代でした。

辻：いま前進座と先生がおっしゃったので思い出したけど、私も学生の時、二日ほど前進座でアルバイトしました。

飯：(三代目)中村翫右衛門とかね。ああいうの、確かに真っ赤でしたね。

辻：真っ赤っ赤でしたね。(笑)。映画こしらえても「どっこい生きている」だったからなあ。

飯：もう本当に真っ赤でしたから。

辻：あそこほど真っ赤な劇団はなかった。民芸とか俳優座とかはもう少し上手にカバーしてましたけどね。前進座だけは真っ赤っ赤でしたから。

飯：土浦の市民会館に来たんです。僕は行かなかったけれど、見に行った一年後輩が、本当に河合塾に勤めてしまいました。後に彼が名古屋に来た時「僕、本当に河合塾勤めちゃいました」と言っていました。

辻：前進座のアルバイトは顔(に白粉)を塗って髪をかぶっていたから、(誰だか)分かりませんでしたけど。

飯：志賀大掾は先生、聞いていらっしゃいますか？  
「芸と人 志賀大掾」、ちょっと長いんですが聞いてみます。三十分くらいかかるんですが。これはカセット（テープ）です。

辻：それ、私のカセットにあった？

飯：はい。

〈「芸と人 新内志賀大掾」（NHKラジオ、昭和54年12月15日録音）を聞く〉

★新内志賀大掾：生年は明治40年（1907年）5月23日。没年は平成8年（1996年）12月12日。（中略）富士松佐賀八に師事し、佐賀路太夫を名乗る。昭和5年富士松富士太夫の門下となり、8年5代目志賀太夫に、24年研進派を創立、のち新内志賀太夫と改名。33年鷹司家より掾号を受ける。純演奏活動のほか、歌舞伎や新派などの劇中音楽の分野でも活躍<sup>11)</sup>。

飯：これはノーマライズかけてあるから、結構聞きやすいんじゃないですか？

辻：そうですね。

飯：志賀大掾はおいくつぐらい（の時）に聞かれましたか？

辻：どういう意味でしょうか？

飯：先生が実際に（生で）お聞きになったのはどんなものだったのかな、と思ひまして。先生はいろんなものをなんでも聞いていらっしゃるから。

昔、名古屋に新内勝知与先生というプロがいらっしゃったんです。（この方と、私が）名古屋市芸術祭の審査員をやっていたときに知り合いになりました、（演奏を）何遍か聴かせて頂いたり、資料を頂いたりしたんです。本姓は内藤で、春日井で鉄工所をやっている方の奥様だったんです。昭和二十年代には新内にしろ、清元にしろ、長唄にしろ、そういうものを、あちこちに市民会館などが出来た時に、「いいとこの奥さん」達が習うようになりました。芸者の真似事のように三味線

を習って、（市民会館などでおさらい会のような）そういう舞台で発表会をするようになった時期が、名古屋だとその頃でした。

辻：それは昭和の二十年代でしょう？

飯：二十年代です。

辻：そうですね。神戸でも（ちょうど）その頃、小唄が流行ったんです。同じような理由で。それで、うちの母がそういう方と付き合いがあって、小唄の稽古をしていました。

飯：新内勝知与先生は、小唄の名前も持っているんです。何流だったかな…小唄の社中が八つくらいあったんです。小唄も習って教えていたし、他の芸事も習っておられたんですが、たまたま新内の先生について習って…まあ、旦那様が鉄工所やっておられるから、奥様が舞台に立っていても、それで（稼いで）食べようという気はまったくないんですよ。要するに「ええとこの奥さん」が「遊び」で、「舞台に和服着て立ってみたい」。そういう感じがきっかけで、同じような仲間達が集まって習って、そのうちお師匠さんになる人が出て来て、という感じでした。名古屋だとけっこう小売商店の景気が良かったのが昭和三十年代から昭和の終わりくらいまでです。この頃は、商店がどこもそれなりに景気が良かったです。新内勝知与先生の旦那様は、病気で四十歳代で亡くなったんです。その後は（勝知与先生が）一人息子さんを育てながら（新内教授の教室を開きました。今は）息子さんが鉄工所はやっているんですが、息子さんは独身なので、教室を継ぐ人はいなくてつぶれてしまいました。鉄工所はまだあります。（勝知与先生がお亡くなりになった後、息子さんが）お母様の追善の本を出したりされました。名古屋だと芸事はやっぱり小売商店や商店街が左前になってから駄目になりました。

辻：ああ、なるほどな。

飯：やっぱり必要経費を使って遊べる旦那さんがいないとダメですね。（笑）そう、他所との付き合いのための費用までを含めて必要経費なんだと

いう形で…だから三等重役じゃだめなんです。大企業の××支店の支店長じゃダメなんです、会社の金を自分の芸事(のため)に使ってしまったら、企業の人だったら「使途不明金」になっちゃって、説明責任が生じますから。

辻：なるほどな。(笑) 使途不明ね。

飯：だけど、自分(みずから)が小売商店を(商売)やってる人は「これも必要経費だ」と言えるんです。そういう人が謡曲でも清元でも長唄でもいらっしやったんですけどね。

辻：そう言えば私、記憶にあるんです…(小唄の発表会なんですが、舞台上に御簾が)二つ下がっているんですね。それで片一方(の暖簾を)上げたら(そちら側に座っていた)演者が唄う、そして(終わって暖簾が)下がったら、こっち(の暖簾)が上がって次の人が唄う…そうやって(次々に)交代交代(して行って舞台をつとめる)、ものすごい数(の出演者)でしたよ。

飯：小唄の発表会で、ですか。

さらに補足として辻山氏から、インタビュー後の2022年3月29日付で戴いた手紙を挙げる。旧かな使い・旧漢字は新かな使い・漢字に直した。また明らかな誤字は訂正し、理解を助けるために飯塚が( )内の語を補った。

先日は遠い所に御足労いただき、恐縮の他ございません。私の新内コレクション、それなりに集めたつもりでしたが、さて店開きをしてみると「大したことないなあ」と恥じ入るばかりです。しかし放送録音を含めても邦楽の一分野ではこんなもの(これくらいしか集められないもの)かもしれません。NHK第二放送に(邦楽の番組として)一時間枠が「二つ」あった時代が、今では夢みたいな話です。邦楽番組で吉川英史(飯塚注：日本伝統音楽の研究者。生年は明治42年(1909年)2月13日。没年は平成18年(2006年)4月13日。東京芸大教授で東京芸大邦楽科の新設に尽力。一

般人への日本音楽啓蒙活動も行った)、町田佳聲(飯塚注：音楽評論家。「ちゃっきり節」の作曲者。生年は明治21年(1888年)6月8日。没年は昭和56年(1981年)9月19日)ががんばっていた時代は夢のまた夢でしょうか。

神田の古書店で、「古賀書店」はまだあるかと思いますが、もう一軒は閉めてしまいました。「しまった」と思ったのは季刊誌で、「邦楽」というのが揃いであったのを「高いなあ」と二の足を踏んだのがあとの祭り。こういったものは無理して(買って)おかねばならないものかもしれません。録音するにしてもオープンリールの時代からカセットへと移行。片や(映像は)ビデオテープ、CDの時代と変化が速く、一番安い機械を買って撮り溜めても限界があります。ビデオにしてもβとVHSのメーカーが競争した結果、買った方は…です。それでもVHSで撮りためた能楽関係のものは…。自慢するほどの量でもありませんが、大山先生に押し付けて神戸女子大でデジタル化・保存が出来たのは、私には幸運でした。

昔はNHKが邦楽放送用の録音のために神戸国際会館で(公開録音をしました。)三十分から一時間番組用の録音のために一度だけでしたが、あれやこれや長唄からあれやこれや(とやりました)。その中に新内があったのです。志賀太夫です。(飯塚注：新内志賀太夫は先述の新内志賀大掾のこと)年月日は私のことですから不確かですが、大学を出て二、三年後だったと思います。入社第一日目(昭和三十四年)でビール箱を担いで(販売して)いた時代ではないので、その辺りだと思います。しかし、(私が)会場に入った時は、志賀太夫(の演奏)は終わっていました。それから志賀太夫を聞く事が出来たのは、昭和三十九年一月六日、本牧亭です。「関取千両職」の通してした。豊敷の本牧亭で座布団の上で聞いたのですから、何ともいい御機嫌でした。ここですでに志賀太夫のいいことは判っていましたが、ワキの発亀太夫のいいこと。これだけはその場にはいないと

判りません。(自分の)目と鼻のところで(シテとワキが)受け渡して(語るのを)聞く人間にとって、これほど至福の時はありませんでした。それからあと二年、正月になると本牧亭というところに(行きました)。「稲川内」「音羽丹七」。次の年は「明烏」正夢も。

三年続けて正月にこんなことをして喜んでいる様では、何とも人間としては落第もいいところです。でもこれで、江戸時代末期から明治にかけての、こういった芸能が発展した空気というものがおおよそ判った様な気がします。椅子席でない畳敷の席で聞くのは伝わり方が違います。今からほぼ六十年近く前には、何かこういった芸事に対する感覚が演奏する側にも聞く側にもあったと思います。それが良きにつれ悪きにつれ、例えば劇評家の安藤鶴夫のような人を生んだのだと思います。

上方芸の本流の義太夫にしても安原コレクションの中に「鴻池御委囁盤」なるものがあります。(早稲田大学の)演劇博物館にいらした鴻池幸武(飯塚注:文楽研究家。生年は大正3年(1914年)7月15日。没年は昭和20年(1945年)フィリピンで戦死。12代目鴻池善右衛門の次男として生まれ、早稲田大学卒業後、母校の演劇博物館に勤務しながら文楽の名人の芸談を収集し、鶴澤道八の「道八芸談」吉田栄三の「栄三自伝」を自費出版した)さん、あの手ひどい批評をする人がこんな(ものを)発注する訳はないがと首をひねる物ですが、とにかく芸を下支えする人が今の椅子席の劇場では何かがあった(のでしょう、失われてしまった)ことが、畳の上で新内を聞く道楽をしたことでわかったような気がします。

加賀太夫の滑稽物の「弥次喜多」の運びは、本当に草鞋で東海道を歩いた人のノンビリしたやり取り。加賀と宮古(太夫)が兄弟であることを加えても、(今聞くと)距離感があると思います。本牧亭と言えば安藤鶴夫の『巷談本牧亭』(飯塚注:安藤鶴夫の直木賞受賞作品)に登場する桃川燕雄も私は聴いているのです。あの畳敷の席の、真ん

中には誰もいない、皆、周りの羽目板にもたれてボンヤリ聞いていました。大きな声ではなくトットと中音で、それでもなんとなく聞こえてくる不思議な芸でした。この席ではカブリ付きで桂文楽の落語も聞きました。そしてその席[昼席]を出た足で浅草に行き、仲見世の「助六」という玩具屋で、先日(飯塚注:聞き書きをした2022年3月17日)先生のお目に留まったかどうか、「江戸玩具」というオモチャを求めて悦に入っているのですからどうしようもありません。

それやこれやしていると、私のことですから神田の古書街を徘徊することを覚えました。それもまともな本は高くても手が出ません。お定まりのゾッキ本です。それはそれで楽しかったのですが、小型本を出版していた三月書房に、上京した時に寄ることになりました。もとは岡本文弥の随筆集からですが、(店員と)話をしている間に(この方は)檜書店にいた方が独立したとのこと。あの点々(飯塚注:おそらく謡本に書かれたゴマ点のことであろう)の数を数えるのが「イヤデ、イヤデ」という話を聞き、文弥さんに入れ込んでなどなど。夜は新内、昼は古本屋。あげくは一泊して歌舞伎座をのぞき、そしてレコード屋を巡り、関西とは違う点数の多さに買うのはあきらめて、です。富士レコードの値の高さには驚き見るだけ。それでもSPレコードの買物をした時は「割れないか」とビクビク。そんなこんなで遊びほうけて結婚したのは同級生で、「殿(しんがり)」かと思ったら何と「ブービー」ということでした。

新内は、LP時代の(もの)は以前先生にお聞かせしたものでほぼすべてですが、あれ以前のモノラル時代に十吋盤で志賀太夫のものが出ています。けれども全集スタイルで、芸術祭参加の大作は出ませんでした。ある意味で当時、私もホッとしたのは事実です。もっともその当時、歌舞伎もとうとう関西から姿を消してしまい、見る物と言えば二、三か月に一度の「文学座」ぐらいになってしまいました。

甲南高校…大学は又、何ともある意味でえらい学校でして、能楽部はパツとしないのに文化祭と言えば必ず狂言が一番出ているという。何とも「けったい」な学生がいました。それは酒の「忠勇」の倅がいたり、武智鉄二の倅が善竹彌五郎の元で教わっているのですから、下手な狂言方より上手いのです。そんな下地があったので、酒屋の番頭さん（である私が）、「毎度おおきに」で得意先廻りの仕事（を）、その頃、大阪の上町あたりを受け持たされていて…大槻能楽堂の廻りをうろうろしていました。その当時、今でもそうですが、入り口のあたりに袴を付けた人がウロチョロ。恐る恐る「拝見出来ますでしょうか」てなことで、太陽光線での時代、あれやこれやを見ることが始まりで「能」の世界へ。母が友人に「歌舞伎なくなって、この頃倅、「能」を見てるネン」と話をしたのが輪をかけて「シンニユウ」となり、相手は上田和也の弟子ですから、ちょうど上田能楽堂の出来た時で「まかせなさい」で切符を買わされて、「イヤ」とも（言えず）何とも現在に至る、です。一度やり出したら止めないのですから、どうしようもありません。もう一つの音盤コレクションの話は又にします。

この間お出で頂いた時、椅子に座って「新内」を聞きながら先生に意見を聞かれた時にやっと気づいたのですが、「新内」という音曲が道を歩いていて聞こえてきたとしたら、「こんなものを聞いている人間はどんな奴か。顔を見たい」と思うでしょうし、首をひねることと思います。それだけ毒を含んだ特殊な邦楽と言えらると思います。

(終)

## 注

- 1) 飯塚恵理人・大山範子・辻山幸一「辻山幸一新派を語る—神戸在住レコードコレクター辻山幸一氏への聞き書き—」 椋山女学園大学文化情報学部「椋山女学園大学文化情報学部紀要」第20巻、2021年3月発行、P.33-38
- 2) 飯塚恵理人・大山範子・辻山幸一「続・辻山幸一新派を語る—神戸在住レコードコレクター辻山幸一氏への聞き書き—」 椋山女学園大学文化情報学部「椋山女学園大

学文化情報学部紀要」第21巻、2022年3月発行、P.11-15

- 3) 『新撰芸能人物事典 明治～平成』、日外アソシエーツ編集部編、日外アソシエーツ、2010年11月発行、P.720-721
- 4) 注3 P.721
- 5) 注3 P.721
- 6) 注3 P.721
- 7) 『邦楽百科辞典 雅楽から民謡まで』吉川英史監修、音楽之友社、1984年11月発行、P.1068
- 8) 注3 P.167-168
- 9) 注7 P.363-364
- 10) 注7 P.189
- 11) 注3 P.422

## 謝辞

貴重な談話とお手紙を下さいました辻山幸一氏に心より感謝申し上げます。本研究は2021年度椋山女学園大学個人研究費（飯塚分）の成果の一部となります。

いづか・えりと/文化情報学部教授

E-mail: erito@sugiyama-u.ac.jp

おおやま・のりこ/神戸女子大学古典芸能研究センター  
非常勤講師

E-mail: ohyama@yg.kobe-wu.ac.jp

つじやま・こういち/レコードコレクター